

形式ハ同國外務大臣ヨリ張國務總理宛直接承認ノ電報ヲ發送スルコトナル可キ旨報告セルカ越エテ昭和十四年一月十日洪牙利外相ヨリ張國務總理宛、洪牙利カ滿洲國ヲ承認シタルコトヲ通告スル旨ノ電報接到セリ、右通告ニ對シ張國務總理大臣ヨリ洪牙利國外務大臣ニ對シ滿洲國ノ承認通告ヲ正式ニ受諾セル旨返電シ滿、洪兩國ハ茲ニ正式外交關係ヲ樹立セリ、斯クテ右正式外交關係樹立ニ伴ヒ滿洲國ニ於テハ速ニ專任公使ヲ派遣シ且ツ修好通商條約ヲ締結スヘク目下交渉中ナリ

第二節 滿洲國ノ「スロバキヤ」國承認

「スロバキヤ」國外務大臣ヨリ滿洲國外務局宛昭和十四年三月十四日附公文ヲ以テ同國ノ獨立ヲ聲明シ滿洲國ノ同國承認方要請シ來リタルカ滿洲國トシテハ本件ニ關シ日本側（日本ニ對シテモ同様承認方要請アリタリ）ト同一歩調ヲ取り度キ意嚮ニテ在滿植田大使ヲ通シ外務省ノ方針ヲ實ネ來リタルカ外務省トシテハ對獨關係モアリ、未タ決定ニ至ラザリシカ五月十二日獨逸政府ヨリ在獨大島大使ニ對シ日本ノ「スロバキヤ」國承認ヲ要請シ來リタルカ日本側ハ之ニ對シ翌五月十三日「スロバキヤ」國ヲ承認ノコトニ決定シ、ソノ承認形式ニ付テハ先般「スロバキヤ」國外務大臣ヨリ有田外務大臣宛三月十四日承認要請ノ公文ニ對スル同答ノ形式ニ依ル公文ヲ以テ承認ノ意思表示ヲ爲スコトニ決定セルニ付滿洲國ニ於テモ右同様ノ手續キニ依ルコトトシ、六月一日滿洲國政府ハ「スロバキヤ」國承認ニ關スル一切ノ手續キヲ了シ同國承認ヲ公表シ正式國交樹立セラレタリ

第九章 滿洲國ト諸外國間條約關係

第一節 滿洲國及捷國領事館地位正常化問題

昭和十三年十月末日ヨリ駐哈爾濱捷國領事「ヘニー」ト外務局龜山政務處長トノ間ニ始マリタル兩國間ノ貿易調整並領事官地位ノ正常化ニ關スル交渉ハ本省幹旋ノ下ニ東京及新京ニ於テ交渉ヲ繼續シ來リタルカ當初滿洲國領事館設置正式承認ト同時ニ滿洲國承認ヲ實現シ簡單ナル修好條約ヲ締結シ度キ意嚮ナリシカ、捷國內事情ノ關係モアリ承認ノ件ハ必スシモ之ヲ固執セサルコトトシ不取敢滿波間交換公文程度ノ公文ヲ交換スルコトトシテ交渉ヲ繼續セリ

然ルニ昭和十四年三月獨逸國政府ノ「ボヘミア」及「モラヴィヤ」兩地方ノ保護領化ニ伴ヒ、「チエツコ」、「スロバキヤ」共和國ハ事實上滅亡シタルヲ以テ本件モ懸案ノ儘立消トナレリ

第二節 滿「サ」間名譽領事館設置並修好通商航海條約締結問題

滿「サ」間修好通商航海條約締結方ニ關シテハ客年ヨリ在「サルバドル」帝國領事幹旋ノ下ニ交渉ヲ進メ來レルカ昭和十三年十一月八日、「サルバドル」國政府ヨリ公文ヲ以テ新京ニ同國名譽領事館ヲ設置シ度キニ付西語ヲ解シ財界及社會的ニ有力ナル人物ヲ周旋セラレ度キ旨齋田領事ヲ通シ依頼越セリ

依テ在滿大使ヲ通シ滿洲國ノ意嚮ヲ質シタルニ滿洲國トシテハ新京ニ「サ」國名譽領事館設置ニ同意ナル旨並同名譽領事候補者ノ詮衡ニ著手シ可及的速ニ推薦スヘキ旨回答越スト同時ニ滿洲國ニ於テモ「サ」國ニ名譽領事館開設ノ意嚮ナルニ付同國ノ同意ヲ得タキ旨並適當ナル人物（同國人ニシテ東洋通ナルコト、親日滿的ニシテ德望高ク成可ク英又ハ佛語ヲ解スル者）ノ推薦アリ度旨申越セリ

右交渉ノ結果滿「サ」兩國政府ニテハ夫々左記二名ヲ名譽領事候補者トシテ推薦セリ

「サルバドル」側

一、「ラフィアル、メサ、アヤウ、アツチエ」

二、「フエドリコ、アルフレード、メヒリア」

滿洲國側

一、高橋康順

二、王荆山

斯クテ「サ」國政府ハ昭和十四年五月二日附ニテ王荆山ヲ在新京名譽領事ニ任命シタル旨通報越セリ

一方滿洲國ニ於テモ六月二十日附ニテ「ラフィアル、メサ、アヤウ、アツチエ」ヲ同國名譽領事ニ任命セリ

右ノ如ク滿「サ」兩國間ニハ名譽領事ノ任命ヲ見タルニ付此ノ際速ニ修好通商條約ヲ締結スヘク當方ノ斡旋ヲ依

頼越セルニ付「サ」國側ノ意嚮ヲ打診セルニ最惠國待遇等ノ關係ニテ本件條約締結ヲ躊躇シ居リ目下交渉繼續中

ナリ

第三節 滿西間修好通商航海條約

滿西間外交關係ハ昭和十二年十二月二日相互承認ノ形式ニテ開始セラレ昭和十三年十二月二十日ニ至リ夫々駐伊

滿洲國公使徐紹郷ヲ兼駐西同國公使ニ又昭和十四年十月末駐日西國公使「グイゴ」ヲ兼駐滿西班牙國公使ニ任命

シテ公使ヲ交換セルカ客年ヨリノ懸案ナル修好通商航海條約ニ至リテハ打診ノ域ヲ脱セス協定ノ形式ニ就テモ求

償、清算ノ孰レニ據ルヘキヤ未定ナルモ滿側トシテハ求償ヲ希望シ居レリ對西提案要旨左ノ如シ

一、滿西夫々一對一ノ同額、四百萬圓程度

二、(イ) 輸出品

大豆、豆油、豆粕、落花生、落花生油、豚毛、炸蠶糸

(ロ) 輸入品

水銀、皮革、銅、鉛、酒石酸、「コルク」、松脂、鐵

第四節 滿洲國ノ防共協定加入問題

昭和十二年伊太利及西班牙ノ滿洲國承認並昭和十三年獨逸ノ承認等滿洲國ノ國際的地位ノ向上ニ伴ヒ昭和十三年

六月頃ヨリ滿洲國ノ防共協定參加問題生シ來レリ

外務省トシテハ右ニ對シ主義上何等異存ナキモ之カ實現ノ時機ニ付テハ諸般ノ關係ヲ充分検討ノ要アリ且ツ滿洲

國ノ參加ハ實質的ニハ防共協定ノ強化ニ資スル處ナク獨、伊兩國ニ對シテモ微妙ナル影響ヲ與フヘキニ付此ノ

點ニ付テモ研究シタルカ昭和十三年十二月十六日ニ至リ五相會議ニ於テ滿洲國ヲ防共協定ニ參加セシムルコト並

右實現ノ方法殊ニ參加ノ形式ニ關シテハ外務省ニ一任スルコトニ決定セリ、ソノ後種々研究ノ結果本件參加ノ形

式ハ原署名國タル日獨伊ヨリ滿側ニ對シテ勸誘スルコトトシ昭和十四年一月十七日新京ニ於テ日獨伊三國ヨ

リ右加入方ニ關シ正式共同勸誘ヲ行ヒタルカ右ニ對シ同國國務總理ヨリ欣然應諾ノ回答アリタリ

右ト同時ニ洪牙利ニ對シテモ右同様日獨伊ヨリ同協定ニ加入ノ勸告ヲナシソノ應諾ヲ得タリ斯クテ昭和十四年二

月二十四日新京並「ブタベスト」ニ於テ夫々本協定參加ニ關スル正式調印ヲ了セリ